IATSS review
Vol. 2, No. 3 1976

運転者行動と性格

詫 摩 武 俊*

性格とはひとりの人間を特色づけている基本的な行動傾向であり、ある人の性格はその人の日常生活のさまざまな場面に表現される。走行する自動車は単なる機械ではなく、それを運転している人の性格が反映している。この論文においては人の性格を基本的な6つの類型に分け、それぞれの特色と運転行動との関係を考察した。

Driver Behavior and Personality

Taketoshi TAKUMA*

The personality of an individual can be reviewed as his fundamental behavioral tendencies. In everyday life, human personality manifests itself in a whole series of different ways. The human element in driving is therefore a vital concern, essential to both understanding the phenomenon of driving itself and preventing death and injuries on our highways. An automobile being driven by a person is no longer merely a machine. Personality has a definite impact on behavior behind the wheel. In this article, six different types of personalities and their relationship to driving behavior are discussed.

1．運転者行動と性格

路上を運転しているものは、それを声に出していうかいわないかは別として、「なんだあいつ、なにをモタモタしてやがるんだ」とか「この野郎、こんな無茶なわり込みをしやがって」などと感ずることが多いであろう。いずれも他人の運転の仕方に対する非難であり怒りである。今日のわが国においては一日中まことに穏やかな気持ちで運転をしたというものはきわめて少ないのではないかと思われる。

ある人の性格は運転の仕方にもよく表れる。乱暴な、慎重な、軽快な、気の弱い、落ち着いた、意地の悪い、軽率な、元気のいい、静かな、風格のあるなど、性格の描写に使用される言葉のいくつかはそのまま運転の仕方の描写にも用いられる。

心理学において性格という概念はさまざまに定義されているが、ひとりの人を特色づけている基本的な行動傾向であると考えてよいであろう。人にはそれぞれいかにもその人らしい行動の仕方があり、これは持続性をもっている。自分のよく知っている人物について、あの人にこういえば怒るだろうとか、こんなときにあの人ならこうするだろうなどと予測することができるのは、その人の性格に安定した持続性があるからである。

性格についてもう少し説明しよう。人の行動は一般にその人の置かれている環境によってさまざまな影響を受ける。環境には自然的・物理的環境もあれば社会的・文化的環境もある。環境という言葉を情況とか事態といい直しても差支えない。たとえば初めて会った人の前では誰でもなんとなく警戒的な気持ちを抱くが、十年来の親友に対しているときには自分自身の心が開かれているのを感ずるであろう。険しい山道を歩いているときの様子と、慣れた散歩道を歩いているときの様子は決して同じではない。知人の結婚式に招かれたときの振る舞い方と、告別式に列したときの振る舞い方とは同じ人間であってもかなり違うのが普通である。しかし、これらの環境的諸条件が類似していても、そのときの各人の行動にはかなりの差が認められる。具体的にいうと、初対面のときから人怖じしないで活発に振る舞える人もいれば、何度会ってもなかなか心の底を見せない人もいる。人の行動はそのときの環境によって影響されるが、それによってだけ規定されるのではなく、行動の主体である人自身に帰せられるべき要因も少なくないのである。性格というのは、広い意味における行動の個人差を環境の諸条件からではなく、その人の主体的条件に関して説明しようとする概念なのである。

ところで性格というのは物ではなく、したがって物理的尺度でもって計測できるものでもない。その人の振る舞い方、考え方、感じ方、動作の中に表出されるものである。服装、話し方、趣味などはもとより、書いた字や描いた絵の中にも性格の特徴は表れる。運転の仕方にも当然、その人の性格は表出されるのである。

＊東京都立大学教授（心理学）
Professor, Tokyo Metropolitan Univ.
原稿受理　昭和51年7月12日

世慣れた母親は隣室から聞こえてくるピアノの音から姉娘が弾いているのか、妹が弾いているのかはもとより、どんな気分で弾いているのかもわかるという。これと同様に、自分の車の運転を友人に頼み、自分は助手席に座っていると、同じ車なのに乗った感じがまるで違うのに気付いた人は多いであろう。車は同じでも運転する人によって運転の仕方がまるで違ってしまうことがあるのである。1ヵ月あたりの走行距離も運転歴もほぼ同じくらいであるのに、何度も何度も事故を起こして罰金を払ったり賠償をとられたりしている人もあれば、何年も無事故である人もいる。車そのものの性能に事故の原因があることもあろうし、不可抗力という場合もあろう。しかし運転者そのものの性格が事故の直接的・間接的原因であることが多いと考えられる。飲酒運転をしたために事故を起こした、と酒を飲んだことが事故の原因であるかのように考える人がいる。しかしこの場合も酒を飲んでいるのに運転をしてしまった、その人の性格に問題があると考えるべきである。車で帰らなくてはならないことを承知しながら、どうしても酒を飲んでしまうことがある。このとき慎重に醒めるのを待つとか、車を置いて帰るとかの方法を考える人と、大丈夫だ行ってしまえと運転する人とがある。両者のあいだにははっきりした性格の差があるのである。

次に性格のタイプと運転の仕方について述べよう。

2．性格の類型

性格の個人差は非常に著しい。顔立ちや身長がそれぞれ違うように性格も千差万別である。しかも幼児より青年、青年より成人と年齢を重ねるにつれてその個人差は幅が広くなり、ひとりひとりが独自性のある存在になっていく。しかし少し注意して人を観察すると、ある一群の人々は明朗で開放的であり、この点においてほかの暗く遠慮がちな人々から区別される。春のような感じという形容がぴったりする人もあれば、秋のような雰囲気をもつ人もある。何でも主観的に考える人もあれば、客観性を尊重する人もある。人の性格にいくつかの型（タイプ）があるということはごく素朴な形で古くから認められてきたことなのである。

性格の研究は顕型的な類型の研究から始まったといっても過言ではない。たとえば紀元前2世紀にギリシャのテオフラストスは「人さまざま」という書物を著して、けちんぼ、猫かぶり、へつらい、粗野などの特徴をもつ性格を軽妙な筆致で描写している。このような典型的性格の記述もひとつの類型学とみることができる。時代は少しあとになるが、2世紀にガレノスは体内には血液、胆汁、黒胆汁、粘液の4種の体液が存在するという説に基づき、そのどれが優勢になるかによって多血質(気分屋で世話好き)、胆汁質(意志が強く短気)、憂鬱質（苦労性で空想家）粘液質（冷淡で沈着）の気質が現われると考えた。4種の体液があるという説、とくに黒胆汁の存在は否定されたが、気質を4つに分ける考え方はその後も長く続いている。

このように類型を設定する考想はギリシャ時代にまでさかのぼり得る古い歴史をもっているが、今日、類型学として総括されているものは、なんらかの原理に基づいて類型的なものを発見し、分類して性格の理解を容易にしようとするものである。

ある一定の時間を限ってみれば、人間の行動には非常に多くの恒常性があり、しかもその恒常性はある一群の人々に共通に認められる。ここに類型学の成立する基礎があるのである。

類型学は20世紀前半のヨーロッパ大陸、とくにドイツにおいて華やかに発達した。これらを支えている理論的背景はさまざまである。どんな観点からどんな種類の類型を考えるかによって類型学にもいろいろな立場や学派がある。

個々の類型論の特徴は専門書に説明されてあるので、日常われわれの身近なところで見られる6つの類型について、運転の仕方の特徴などと関連づけながら述べていくことにする。6つの類型のどれにも入れられない性格もあれば、2つ以上の型の要素が共存している場合もある。しかし基本的にはこの6つの類型の知識があれば、他人の性格を理解する際きわめて便利であろうと考えられる。

(1) 内閉性性格

ドイツの精神医学者クレッチマーが分裂質と名づけた類型に相当する。非社交的、内気、控え目、ユーモアを解さない、孤独、利己的、空想的というような特徴をもつ。新聞の社会面を賑わすような俗世間的なことには関心が薄く、他人は他人、自分は自分と割り切ってしまう冷たさがある。知らない人に道を聞かれても気が向かないときにはロクロク教えてやろうともしない。偏屈で融通がきかず周囲に溶けこむことが難しく、その意味で社会的適応性はよくない。だれとでも気軽に話のできるような如才なさとは無縁である。ひとりでいることが苦にならず、

知らない人に自分の方から話しかけるなどということはない。長距離列車で隣り合わせに座ってもずっと無言のままである。社会生活を円満に営んでいくためには他人の立場に立って考えるということが必要である。たとえば、不自然なお世辞とか見えすいたほめ言葉などは好ましいものではないが、知人がこれはうちの子どもだよといって子どもの写真を得意になって見せたら、その親の気持ちを汲んで、それに関心を示し、軽くほめてやるくらいのことはしなくてはならない。ところが内閉性性格の人はこのようなことが苦手である。正直といえば正直、誠実といえば誠実であるが、ときどき相手を深く傷つけるようなことをいってしまう。このようなことをいえば相手はどうとるだろうという配慮がないのである。

この型の人は、一面において優雅に洗練された貴族的な繊細さをもっている。音楽や絵画の鑑賞、読書の傾向などに高尚な趣味がうかがえる。世俗的なことを嫌って現実の生活から遠く離れた夢幻的なものに憧れたりする。平常は無口でおとなしいが、一度興味がのると何時間でも情熱をこめてしゃべり始める。しかしまた迷うことが多く、なかなか決断のつかないのもこのタイプの人である。物を買うとき、物を注文するときなどあれこれと迷って時間ばかり過ぎてしまう。非常に感じやすい敏感な面とぐずぐずとして煮えきらない面とが混在しているのである。ぼんやりとしているようであるが、ときどき人間に関することや社会の問題に対して鋭い観察を示し、整然と筋の通った意見を述べる。したがって畏怖されたり敬遠されることも多い。内閉性性格の特徴をまとめてみると次のようになる。

1）他人と話すよりひとりでいる方が楽である。
2）悪気はないのについ冷たい皮肉をいってしまう。
3）親しみにくい人だという印象を与える。
4）通俗的とか庶民的といわれているものを軽蔑する傾向がある。
5）他人の不幸に心では同情していても、その気持ちをうまく表現できない。
6）デリケートなところと鈍感なところとがある。
7）お世辞や愛想がいえず、融通がきかない。
8）自分の私生活を他人に見られることを嫌う。
9）人の好き嫌いが激しい。最初の印象で嫌なやつだと思うと、その人とは交際できない。
10）何かを始める前にためらうことが多い。簡単なことでもいざ実行しようとするとなかなか決心がつかない。

このような性格の人の運転行動はどうだろうか。まず車のメカニズムとか交通法規についての知識は非常にくわしいか、まるで知らないかのいずれかである。なぜこんなことまで知らなくてはならないのかということまで知っていたり、勉強したりしていることもあれば、免許をとるときだけ覚えてあとは何の関心ももたないものもいる。車内の感じもそうであって、大変いい趣味のアクセサリーを揃えて上品な感じを出していることもあれば、汚れ放題に汚れて異様な臭気を発することすらある。

運転の仕方は概して自己流で、くせのある運転をする。これは自分のやり方に満足して、自分よりうまい人の運転の仕方を模倣しようなどという気がないためである。他人が同乗しても運転の仕方は変わらない。よくいえば冷静に、悪くいえばまわりのことを顧慮せずに機械を操作する。もともと広い範囲にわたって注意するほうではないので、何かひとつのことにとらわれて心の視野が狭くなると思いがけない事故を起こしたりする。トラブルがあったときに妙な理屈をつけて、しつこくからんでくるのはこのタイプのものに多いようである。

(2) 同調性性格

躁鬱性性格ともいう。大体において前記の内閉性性格と正反対の性格である。すなわち、開放的で周囲の情勢によく適応し、人間らしい暖かみを感じさせる人物である。子どものような善良さ、単純さを成長してももっていて、嬉しいときには心から喜び悲しいときには心から悲しむ。話題も多く話術が巧みである。ときに元気よく大きな声で、ときには沈んでボソボソと話すこともあるが、この人の話は自然のユーモアがあって、初めて接する人もいつのまにか彼の話に引き込まれてしまう。したがって友だちが多く、各方面に親しい人をたくさんもっている。何ちゃんなどと愛称で呼ばれることが多く、みんなから愛される。仕事をサボったり、ほどほどに悪いこともするが、不思議にみんなから憎まれない。得な性格である。内閉性性格のもののようなとげとげしい感じ、しつこい理屈っぽさ、コチコチの形式主義、非常識な理想主義などはみられない。むしろ妥協的で、飲んだり食べたりの生活を楽しみ、やや通俗的で実際的なことに関心をもっている。

喜怒哀楽の感情の表現はきわめて直接的である。いつまでも執念深く腹の中にしまっておくことができない。怒るときは真赤になってどなりたてるので、まわりのものはびっくりするが、猛烈な低気圧が過

ぎるとあとはカラリとしたさっぱりした気分になる。いつまでもぐずぐずとひとつのことにこだわっていることがないのである。おしゃべりで世話好きであり、会の幹事役を積極的につとめたり、困っている友人のために奔走したりする。宴会などの席で大して上手でもない芸を恥ずかしげもなくやってみせるのもこの型の人物で、彼がいるかいないかで会の雰囲気は非常に違ったものになる。

子どもに慕われるのもこのタイプの人である。幼児がすぐなつき、あのおじちゃんのところに行きたいとか、あのお姉ちゃまと遊びたいという。このように誰にでも親切で、気取ったところのない好人物である。しかし時には他人の私的な生活にまで無遠慮に立ち入って迷惑がられることもある。

やる仕事は手早く決断力に富み、いうべきことは逡巡しないで堂々という。頼もしい親分という感じがする。しかし考えることに一貫性がなく、また熟慮しないで着手して失敗することもある。おだてられて調子にのりやすいという欠点もある。気分がときに沈むことがあるが、このときも人を突き離してしまうような冷たさはない。現実の情況によく溶け込み、相手の気持ちに共感することができる。統率力があり、人あたりもよいので人を相手にする仕事にはとくに適しているが、細かな事務的な仕事は不得意である。同調性性格の特徴をまとめてみると次のようになる。

1）単純で、ひねくれたところがない。
2）気だてや考え方の違う人とも気軽につき合っていける。
3）喜びや悲しみの感情を率直に表現する。
4）陽気で明るいときと、沈んで気の重いときとがある。
5）会の世話役や幹事役を苦にしないでやれる。
6）仕事をたくさん引き受けてしまって忙しがることが多い。
7）常識的で、妥協的である。
8）気軽に冗談をいったり、はしゃいだりする。
9）親切すぎて相手にうるさがられたり、迷惑がられることがある。
10）現実の生活を尊重し、多面的に活躍する。

この型の人の車の扱い方には以下のような特徴がみられる。

まず全体に鷹揚であるからあまり細かなことにこだわらない。ほどほどに規定以上の速度で走ったり、駐車禁止のところに止めたりする。しかし社会的常識が発達しているし、相手の立場や周囲の事情を考えることができるので、決定的に悪いことはしない。車の流れに従って自分も走り、奇をてらうようなことをしない。基本的に親切なので、故障して困っている人があると、急用でもない限り、わざわざ近寄って相談にのったり援助したりする。とくに若い女性や老人には親切である。まめまめしく身体を動かすことは好きであるが、一面また面倒くさがりでもあるので、車の手入れなどは気の向いたときにしかやらない。妙なアクセサリーなどを買い込んで得意になって見せびらかす、子どもっぽいところもある。運転の仕方は概しておとなしく、少なくとも粗暴とか、猪突猛進などということはない。好奇心が強いので、A町からB町にいくのでも、いつも同じ道を通らず、地図など参照して道順を変え、そのことを楽しみにしている。ややお天気屋なところがあるが運転技術は安定している。

(3) 粘着性性格

いわゆる真面目人間である。粘り強く、几帳面で凝り性である。たとえば机の引出しの中はキチンと整理され、手紙の返事を忘れることもなく、会合には定刻に姿を見せる。はんこの押し方にまで、その几帳面さは表れていて、横を向いていたり、さかさまになったりせず、所定の位置に正しく押されている。習慣、義理、前例を重んじ、突飛な行ないをしたり奇抜な服装をしたりすることが少ない。他人、とくに目上のものに対してはいんぎんで丁寧であり、自分自身も修養して精神的に向上することを心がけている。

几帳面であるということはまた軽快さがないということである。このタイプの人は手早く、要領よく仕事をするということが苦手である。彼がやることは、良くいえば重々しく確実、悪くいえばのろまで融通がきかない。日記などを克明につけ、収支簿などもよく整理されている。生活についていろいろの統計をとり、それを楽しんでいる。

上司や先生、むかし世話になった人に対する態度はまことに折目正しく丁寧で、めったに悪口をいったりすることがない。身だしなみもよく、流行おくれではあっても手入れの行き届いた服を着ている。同調性性格のものが無頓着なのと対照的である。

忍耐強く、根気がよくて一度やり始めたことを最後までやり通すしぶとさがある。少しずつ地味に努力を重ねて遂に目標に到達するというのは、このタイプのものの生活のいろいろな面にみられる。しか

し他面、頑固で自分の考えを変えようとしない。軽妙なユーモアをまじえて話したり、若い女性を軽くからかったりすることとは無縁である。

粘着性性格のものの話は概してまわりくどく冗漫で、要領を得ないことがある。見た映画の内容など話して貰うと、内閉性性格のものは、ときに飛躍したりひとりよがりになったりすることはあるが、どこか鋭く本質をつかんでいるところがあって、彼独特の見方をしていることを察知することができる。同調性性格のものは、大筋をよくつかみ、しかも愉快そうに身振りなど入れて話すので、聞いているものは実際の映画を見なくても見たような気分になってしまう。それに対して粘着性性格のものの話し方はとかくまわりくどく、聞いているものは彼が誠実に一生懸命話してくれるのはよくわかるのであるが、つい退屈してしまう。誠実そのものの人物だが、つき合ってみておもしろい人ではないのである。

このタイプのもうひとつの特徴はときどき爆発的に怒るということである。ふだんは我慢強く、温厚であるが、年に一度か二度くらいのわりで、こらえにこらえたエネルギーが大音響とともに爆発するように激しく怒り、自分の正しさをかたくなに主張する。一般にものごとを堅苦しく考えてしまって融通性がない。不正直なことや狡いことを極端に嫌うのである。さっぱりとしたところがなく非常に執念深いところもある。粘着性性格の特徴をまとめてみると次のようになる。

1）一度始めたことを粘り強くやり、熱中するとやめられない。
2）ふだんはおとなしいが、たまに興奮してくると自分が押えられなくなる。
3）きれい好きで、整頓や掃除を徹底的にしないと気がすまない。
4）几帳面で、仕事のやり方が丁寧で細かい。
5）頑固で他人の意見になかなか同調しない。
6）正義感が強く、不正直なことや曲がったことに対して人よりもきびしい。
7）地味で義理がたい人という印象を与える。
8）生活を正しくし、精神をきたえようと思う。
9）とかくものごとを堅苦しく考え、手際よく処理できない。
10）話の理解が遅く、また話の仕方がくどい。

この型の人の運転行動にはいろいろな特徴がある。職業的に義務づけられているわけではないのに、運転についてくわしい日誌をつけていたり、リットルあたりの走行距離、月間走行距離、所要時間などを詳細に記録している人があったら、まず粘着性性格の人と考えて間違いない。とにかく几帳面なのである。車の手入れなどには熱心になる。多少けちなところがあるのではないかと思うほど車を大事にする。定期点検などもきちんと受け、一定の距離を走ると必ずオイルの交換をする。乗車する前に、ボンネットをあけて必要なところをチェックする。したがって車は長持ちする。手入れの行き届いた旧式の車の所有者にはこの型の人が多いのである。

運転の仕方は教習所で教えられたことを忠実に守り、法規に厳正に従っている。一旦停止とか徐行区間など、他車も他人もいない深夜でも規則をしっかりと守る。その意味で模範的な運転者である。自分が法をよく守るだけでなく、それを他人にも要求する。したがって他人の乱暴な運転に対しては本気で憤慨し、ときには口争いやけんかにまで発展する。よくいえば正義感が強いのであるが、悪くいえば愚直ともいえる。必要な工具とか各種の道具類もよく揃えているが、予期しないことが突如として起こったときにとっさに対応行動がとれないことがある。また、自分は正しく運転しているのに、それが周囲の車の一般的な速度と違うために、相手にいやがられたり、ときには追突されるなどの被害者の立場におかれることもある。

(4) 顕示性性格

高揚性性格ともヒステリー性性格ともいう。わがままで勝気、嫉妬深くて派手好きである。自分が無視されることに我慢ができず、背伸びをしてでも先に出ようとする。虚栄心が強く、自己中心的で感情が変わりやすい。

この型の人のまわりにも、何となく華やかな雰囲気がある。浅くても広い知識、他人の受け売りではあっても新しい話題を用意している。とくに最近、評判になった小説や新劇、音楽会やバレーなどについてはどこで仕入れたのか、なかなか専門的な批評もすれば、細かな楽屋裏の話にも通じている。その上、彼の話術は同調性性格のもののそれとは違った意味で巧みである。素朴な感じではなく華麗でありやや作為的であるが洗練されたように見える。表現はオーバーで表情が目まぐるしく変化する。

服装の流行などに敏感で、おしゃれである。自分をよくみせるために、すぐばれてしまうようなうそをつくこともある。また自分自身のことや自分の親のこと、家庭のことなどを自慢したりする。人の世

話になったことは忘れても、人の世話をしたことはよく覚えていて恩に着せるようなことをいう。相手が弱いとみると高圧的な態度をとり、強いものや権力のあるものには見苦しいほど迎合する。彼らにとってもっとも不快なのは、無視され黙殺されることである。自分の話が聞き流され、自分が話の中心からはずれてしまうと、彼らは相手の話の腰を折ってでも自分の方に話題をもっていこうとする。

顕示性性格のものは、概して人の好き嫌いが激しい。自分を受け入れ、自分を賞讃してくれる、いわゆるお取り巻きと、自分の心の内側を知っているのではないかと不安の念をもたざるを得ないような苦手というものを区別している。そして苦手の人には十分注意を払いながら、裏に回るとさかんにその人物の悪口をいう。多くの人から尊敬と注視を浴びたいと思っているものにとって大きな脅威は、自分より実力のあるものが身近に出現することである。ケチをつける、中傷する、故意に無視するという一連の反応がここにおいて展開する。

負けることが嫌いなために努力するが、うまく行かないとき、この型のものは自分の能力が十分でなかったとか、自分のやり方が悪かったというように自分の側に原因があったとは見ないで、だれかが自分に意地悪をしたというように思いこむ。そしていよいよ自分の立場が悪くなると、風邪をひいたとか腰が痛むといって、結果的には具合よく病気になってしまい、病気の中に逃避することになる。

顕示性性格のものには、彼を利用しようとするものはいても心の通い合う友人はいない。おとなになり切れない未熟な面を残した性格である。この型の特徴をまとめてみると次のようになる。

1）他人をあてにして、よりかかろうとする気分が強い。
2）人の好き嫌いが激しい。
3）わがままで自分本位の考え方をする。
4）自分を実際以上に見せようとする。
5）くやしがり屋で負けず嫌いである。
6）他人の意見に左右されやすい。
7）自分がみんなにもてはやされないとおもしろくない。
8）友人や知人の成功をねたましく思う。
9）華やかで社交的な人という印象を人に与える。
10）話の仕方が大げさで、体の調子のわるいことなどを誇張していってしまう。

この型のものの運転の仕方には次のような特徴がある。まず、いつも他人の眼を意識しているということである。車そのものも派手なものを好む。あまり街を走っていない車、最近売り出したばかりの車、自分で手を加えて改装したものを好み、どこにでもある国産車などを露骨に軽蔑する。

彼の運転は同乗者がいるときといないときとでかなり相違する。同乗者がいると、自分の車の優秀なこと、運転技術の卓越していることを示そうとしてかなり強引で派手な運転をする。若い女性を助手席に乗せて、わずかのすきに割り込んだり、無理な追い越しをしたりする男がいたら、まず顕示性性格のものと考えて差支えない。パッと目立つことや他人の話題になるようなことをやってみたいのである。ところが一度、事故など起こして警察官の前に連れていかれると、卑屈なくらい丁重に謝罪したりする。自分の実力以上の腕を見せたがるので事故を起こしやすいタイプといってよいであろう。

(5) 過敏性性格

いわゆる神経質な人のことである。のびのびとした明るさや大まかなところがなく、心配することが多い。感受性が鋭く、自分の内や外の変化を敏感に感じとってしまう。目の前にいる人が自分の話を興味をもって聞いてくれるか、それとも退屈してしまっているかということが気になるのである。

神経質だといわれる人にあまり頭の悪い人はいない。むしろすぐれている場合が多いのは、この感じとる心の働きは知能と関連があるからである。失敗したり予想通りにいかなかったりしたときに、他人を非難したり攻撃したりせずに、落ち度は自分にあったのではないかと考えてしまう。わずかのことで悩んだり、他人のことを考え過ぎて疲れやすい。心配なことがあるとお腹の具合がわるくなったり、寝られなくなったりしやすいのもこのタイプの人である。

気が弱いために大事な場面であがってしまうということもある。試験のようなときに実力が発揮できない損なタイプである。友人には誠実で思いやりがあり、しかも出過ぎたことをしない。また良心的で慎重な生活態度は交際しているうちに深く信頼されるようになる。

自分を過小評価しやすく、些細なことで挫折してしまう。人から何かいわれるとそれを聞き流したり、無関心でいることができず、それに心を奪われてしまうのである。他人が何気なくいったことがいつまでも心から離れず、そのために悩んだり、苦しんだりする。多くの人の反対を押し切って自己を主張す

るのは非常に難しいことと考えている。仕事をしても客観的には立派にできているのに、自分ではなかなか満足できないのもこのタイプのものの特徴である。過敏性性格の特色をまとめると次のようになる。

1）あれこれと迷ってなかなか決心がつかない。
2）人にいってしまったことや、人からいわれたことを気にしやすい。
3）うまくいかなかったことを愚痴っぽくこぼす。
4）弱気で、ものごとを悲観的に考えやすい。
5）他人が自分のことをどう考えているかを気にする。
6）他人のおもわくを気にしていうべきこともいいそびれてしまう。
7）何かで失敗したとき、その原因が自分にあるように思ってしまう。
8）意志が弱く、少し難しいことにぶつかると、へこたれてしまう。
9）不愉快なことがあったり、神経を使うことがあるとお腹の具合が悪くなる。
10）食物にごみがついていたり、他人が触れたりすると食べられない。

この性格のものの運転の仕方は臆病ともいえるほど慎重である。自分が事故の加害者になった場合を考えて決して無理なことをしない。エンジンの調子だとか、サイドミラーの角度を気にして、少し具合が悪いと納得のいくまで調整する。先輩から、君のブレーキのかけ方はどうだとか、方向指示灯の出し方が早すぎるなどと注意されると、そのことを非常に気にする。他人の意見に左右されやすいのである。あまり親しくない知人や自分の上司にあたる人を車に乗せることを好まない。しかしどうしても乗せなくてはならないことになると、その人が自分の運転の仕方をどうみるかが気になって、何でもないところでエンストなど起こしてしまい、あわててしまう。ひとりで運転するときよりずっとへたになってしまうのである。大きな事故を起こすことは稀である。高速道路などで自分より小さな車に追い越されても別に何とも思わない。思い切ったことができないので運転の仕方はなかなか上達しない。いつになっても初心者のような走り方をする。初心者マークを早くはずしたがるのではなく、いつまでもつけていたいと思う方である。一直線の道路の前方で子どもが道を横断しようとしている。自分の車の速度と子どもとの距離に応じてブレーキをかけるものであるが、このタイプの人は万事につけて慎重なので、他の人ならそのまま走るときに早目にブレーキを踏んでしまい、そのときに後続車に追突されてしまうような危険がある。事故の加害者になるより被害者になりやすいのである。

(6) 過信性性格

固い信念と満々たる自信がこの人の行動を支えている。過敏性性格の人が弱気であるとすると、これは強気の人である。ひとつの考えが定着すると、これを変化させるのはかなり難しい。自分は正しいのだ、自分のやってきたことに間違いはなかったし、これからやろうとすることにも間違いはないのだ、という強い考えがあって、これが中心となってこの人の人生が回転している。実行力は旺盛であるが、でしゃばりで人を押しのけ、自分の考えを押しつける。このタイプの人は、この人の知能とか見識が高いか低いかによって、まわりの人の評価や態度が大きくかわる。この人が知的にすぐれていれば、その判断は迅速で勇気があり、しかも強い意志でどんどん実行するので、みるからに頼もしいという印象を与える。不機嫌なときには取りつく島もないように見えても信頼してついていけば、大丈夫という感じをみんなに与える。ところがこの型のもので知能が低く、これといった見識もない場合は、好ましくない面ばかりが目立ってくる。強情、専制的、高圧的、尊大、人間不信、横柄、高慢、頑迷、むこう見ずといった特徴がこの人の中に見られ、人望のない、気ばかり強い人物という印象が強くなる。

知能の高低にかかわりなく、過信性性格の人はあまり人に愛されない。ときに信頼を寄せられることはあっても、デリケートな思いやりとか洗練された感じに乏しく、人の気持ちを汲みとることがへたである。他人に対する態度や日常の会話にも上品さがないのである。

過信性性格のものは概して抗争的で攻撃的である。世の中には自分のほうが正しく、相手が間違っていると思っても、それを主張するのが面倒だということがある。しかしこの型のものは、自分が正しいと思えば損得を度外視しても争う。そうしないと気がすまないのである。ほかの人を信用せず、何でも自分でやってしまおうとする。そのためにどうしても孤立しがちになる。自主的、活動的、積極的でかるがるしく動揺しない信念をもつのがこの型の特徴であるが、これはまた独断的、頑固、内省に欠けるということにもなるのである。過信性性格の特徴をまとめると次のようになる。

1）自分なりの考えをもっていて他人のいいなりにならない。
2）将来のことを強気に考える。
3）利己的で欲が深い。
4）なかなか人を信用せず、人のことを疑いやすい。
5）仕事が手早いので人に頼まず自分でやってしまうことが多い。
6）自分が正しく、相手が違っていると思うと徹底的に相手をやっつける。
7）自分に都合のいいようにものごとを考えやすい。
8）自分は価値のある人間だと考えやすい。
9）活動的で、積極的にものごとに取り組む。
10）気軽に交際できる友だちが少なく、敬遠されがちである。

過信性性格のものの運転は概して強引である。狭い道で対向車と出会っても相手がバックするのを当然のことのように考える。よくいえば男性的で力量感に溢れた運転であるが、他面、粗暴でひとりよがりである。自分の運転の仕方について批判的なことをいわれると一生懸命抗弁したり、ときには怒ったりする。他の車が彼の進路を妨げるようなことをすると、躍気になって競争し、自分の方から仕返しをするようなこともある。広いバイパスなどで抜いたり抜かれたりしながら平行して走っているものがあるが、この中にはこのタイプのものが多い。交通法規の上で自分が正しく相手が違っていると思うと相手が屈服するまで攻撃の手をゆるめない。とにかくこわい人なのである。

以上、6つのタイプのそれぞれとその運転の仕方の特色について私見を述べた。運転免許をとれるのは18歳からで、この時期には個人個人の性格はそれなりに安定して各自の特徴がはっきりとしてくる。

ここに述べたのは基本的なタイプで、実際の人の性格は、この中のどれかにあてはまるというのではない。いくつかのタイプの混合もあれば、いずれとも決められないものもあろう。しかし各自の性格はどれかのタイプには近いわけで、運転をするときにひとつの参考にはなるであろう。運転の仕方は性格だけによって決定されるのではなく、いろいろの経験を重ねることによっても変化する。それでもなお個人の性格はそれほど変わるものではなく、この性格の違いは運転の仕方に反映するのである。

参考文献

1)依田新：性格心理学、金子書房、1968.
2)戸川行男：性格の類型、性格心理学講座第1巻、1961.
3)佐治守夫編：人格、講座心理学10、東大出版会、1972.
4)詫摩武俊：性格、講談社、1971.
5)詫摩武俊編：性格心理学、大日本図書、1974.